

私立 東京薬科大学

プログラムの名称：人間知を育む相互交流プログラムの展開

-- 異世代や多様な価値観を包含する状況の創造

プログラム担当者：薬学部 教授 土屋 明美

キーワード

1. 人間知 2. 学習のつまずき 3. 世代交流 4. 将来展望
5. 自己表現

1. 大学の概要

東京薬科大学は“人類の福祉への貢献を志向し、ヒューマニズムの精神を原点とする視野の広い有能な人材を育てる”ことを基本理念とし、1880（明治13）年創立のわが国私学最古最大の薬学部と、1994（平成6）年に設立された生命科学部の2学部からなる理系総合大学である。薬学部は学部及び大学院教育を通じてわが国の医療、衛生、製薬の分野を支える多くの優れた薬学人を養成してきた。近年医療人としての薬剤師の役割が一段と重要視されているが、本学は他学に先駆けて1981（昭和56）年に医療薬学専攻大学院修士課程を設置して、医療の世界に高度な知識をもつ指導的薬剤師を供給している。

一方、バイオサイエンス振興への時代の要請に応えてわが国最初の生命科学部として発足した生命科学部は、生命現象の分子的理解と応用を目指す分子生命学科と、生命科学の側から環境問題にアプローチし、その解明と応用を目指す環境ゲノム学科から成り、学部卒業生の進学率70%という大学院教育を通じて、有為な生命科学研究者、バイオテクノロジー研究者、高級バイオ技術者の養成にすでに大きな成功を収めている。

2. 本プログラムの概要

本取組は、学生・教職員の人間知を結集して学生の人間力を高め人間性豊かな社会人の育成を図り、社会に貢献する人材育成に資するため、多様な形態の相互交流プログラムを展開する。相互交流の対象は学内での先輩・後輩・仲間や教職員との交流にとどまらず、子供から大人まで広く地域の方々や卒業生などと出会い、体験を通して人間知を育み、人間性豊かな人材を育成する。

学生は薬学・生命科学の知識を生かした活動を媒介として子供たちや卒業生と交流する（世代交流プロジェク

ト）。また、学生は近隣の施設や学校を訪問し、高齢者や障がいを持つ方と触れ合い、多様な価値観と向き合う体験を通して人間知をより豊かに深く育ていく（地域交流プロジェクト）。

学内においては学生の基礎学力をより強固なものとし苦手科目が不得意科目にならないように学習のつまずきを早期に解決する教育環境を整え（学びプロジェクト）、諸検査により自己理解をすすめて、青年期特有の悩みなどには専門家がグループ形式で関わり人間関係の在り方について体験学習をする（健康プロジェクト）。

さらに、全学的に学生生活の実態を把握した上で、教職員は現代を生きている学生の理解と対応方法についての研修をすすめて、良好な学生・教職員関係の創造を目指す（研修評価プロジェクト）。

3. 本プログラムの趣旨・目的

本取組は、学生と教職員がそれぞれの人生においてすでに備えている「生きる力」「人生の可能性」「生きる知恵」ともいうことのできる「人間知」を発掘し、育て、結集し、大学が真の意味で知の共同体として十分に機能し社会に貢献する人材を育てることを目的として展開される。

取組の展開にあたっては、学生と教職員だけではなく、卒業生や子供たち、地域の方、地域に暮らす障がいを持つ方、高齢者などとの直接的な交流の機会を設け、深みのある人間知を体得する機会をもつ。

大学での学問の基礎ともなる、「なぜ、どうして」という問題意識は、確固たる知識の集積の上に立って初めて創造的な問いになる。そのためにも、基礎学力を保証するために積極的に補習機会を設ける。

一方、大学生活を自分らしく楽しく過ごすことも重要な課題であるが、友人との関係のトラブルや進路について迷うことも多々あろう。しかし、勉学や人間関係につまずくのは学生時代に限ることではなくいつで

も生じることであり、大切なのはいかにしてその困難に対処するかである。

本取組では、学生相互の人間関係の知恵を生かしつつ専門家からのアドバイスを得るようにグループカウンセリングを行い、自己表現ワークショップに参加し、困難を乗り越える人間知を学生自らが獲得することの支援をする。このように学生は人間形成の重要な時期に、同世代との交流にとどまらず、人生のモデルともなる先輩や子供との世代間交流により将来展望を拓き、自らのアイデンティティーを形成することが促進されるのである。

本取組は地域の人々や卒業生が積極的に大学に関与できる開かれた大学の一つの姿である。大学は社会のニーズを感知するアンテナを立て、第三者の意見を真摯に受け容れつつ、科学の本質を探究する責務を負う。地域に出向いて「くすりの授業」を行い、施設の利用者と共に薬草栽培や田んぼ作業を共働することなどは大学の地域貢献にとどまらず、正確な科学知識の普及にもつながる。

4. 本プログラムの独自性（工夫されている内容）

(1) 相互交流の舞台を学内と地域に設定し、よりダイナミックな展開を志向する

(i) 大学に先輩や地域の方を招いての交流

地域の方や先輩を大学に招き活動をとにもする。世代交流プロジェクトでは、2つの交流プログラムを展開する。

「せんばい最前線」

本取組では学生自らがセミナーを企画・立案し、実行するという一連のプロセスを体験する。次の事例はいずれも学生からの要望を実現したものである。

事例1：「MRの仕事をもっと知ろう」

1981年卒業の杉山利一先生（アステラス製薬（株））より、MRの仕事の実際について体験を交えて講演をいただいた。最後にMRに求められる資質として薬学部生への期待が寄せられた。

事例2：「製薬企業の研究者って？」

～新薬開発に夢を抱く君に～

1983年卒業生の高橋雅行先生（第一三共（株）研究開発本部 薬物動態研究所）より研究所での仕事や研究者になるにはどうしたらよいか、何が求められているかなどの講演と活発な質疑応答。

事例3：「代替医療について」

卒業生の渡辺方乃先生（いろは堂薬局）より、

現在行われている代替医療の考え方、主な代替医療、薬局での代替医療の取り入れと可能性についてセミナー形式で行われた。

Kids' Labo

理科離れがいわれているが、本学の特徴を生かしての楽しく知的魅力にあふれる理科実験は小・中学生にとっても、大学生にとっても世代交流と知的な関心を共有する機会ともなる。

事例4：「はっばのひみつ」

はっばの構造と役割（光合成）を学びながら二酸化炭素と地球温暖化について考えよう。場所：東京薬科大学生命科学部実習室、八王子市児童館、中高生の大学体験活動07。

2時間かけての実験で、顕微鏡ではっばの構造を観察し、葉緑体で澱粉が作られることを認識した。そして、はっばの果肉をていねいに除くと、葉脈だけが残り、その繊細で美しい姿に子供たちは驚いていた。この葉脈を着色し、しおりを作った。参加者たちはふだん見慣れた「はっばのひみつ」とでき上がったしおりに喜び大切そうに持ち帰った。また、学内にある池から汲んだ水の中の微生物も観察し、小さな生命が水の中にあることに驚いていた。実験後は三々五々学園祭を楽しんで帰宅した。

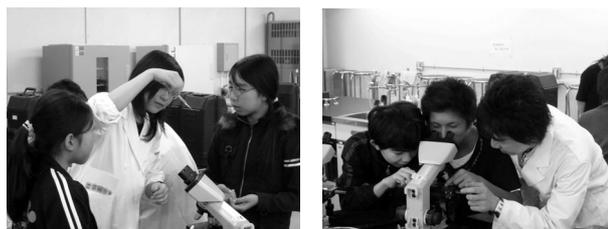


写真1 微生物の観察

(ii) 地域の施設や学校を訪問して交流する

地域交流プロジェクトでは、学生と施設の方々と一緒に薬草栽培や米作りなどをする。高齢者施設での傾聴ボランティアも人生の多様さにふれる機会となる。施設や学校でのくすりや環境に関する授業も本学ならではの展開である。

事例1：2007年11月に、日野市立東光寺小学校において5年生77名を対象に「日野用水の水質検査」を教員5名、大学院生1名、学部生23名が参加して出張授業を行った。授業では1週間前に児童らが教員とともに小学校の近隣を流れる日野用水の2地点から採水した水を資料として、パックテストによるpH測定及びCOD測定を行った。検査の意義を考えるために、採水した水に加えて、ジュ

ースやアルカリ洗剤を混入した水についても比較実験を行った。さらに、BODを算出するために、大学にて前処理した水の溶存酸素量を実際にビュレットによる点滴実験（ウインクラ法）により求めた。

授業の進め方 授業は簡単な説明とデモンストレーションを教壇で示した後、9班に分かれて班ごとに実験を行った。学生らは出張授業の経験と学年を考慮し、2、3人のグループとし、1グループで児童1班を担当して実験を補佐及び指導した。

学生の体験 参加学生は；実習で学んだことを生かしたい、理科の面白さを伝えたい、大学の地域貢献に参加したいなどの動機で本取組に参加している。実施後は；児童らの積極的な反応が新鮮だった、説明することの難しさを知った、教えることで知識を再認識できた、などと感想を述べている（写真2）。



写真2 水質検査

事例2：高齢者との交流。八王子市堀之内「ファミリーイン堀之内デイサービスセンター」での交流：春に向けてチューリップの球根植えを行う。通所者、施設職員、本学生、教員、職員でプランターに土を盛りチューリップの球根を協力し合って植えた。参加者は全員女性であったが、外の空気に触れることも久しぶりということで、土いじりなどから遠のいていた方も大変喜んでくださった。最初は学生の作業を見ていただけであったが、徐々に学生に対して土の混ぜ方や球根の植え方、土のかぶせ方、霜対策などを教えてくださった。生き生きとした表情で指導してくださったことは印象的であった。職員の方々も大変楽しいひと時であったと喜んでくださり、学生からもお年寄りがだんだん元気になり、嬉しそうにお話して下さる様子を見ることができ、参加してよかった、このような経験ができてよかったとの感想が寄せ



写真3 球根の植え付け

られた。

事例3：通所授産施設「かたくりの家」での交流。春に向けてチューリップの球根植えを行う。通所生、職員、学生、教員、職員でこれからお互いに協力し合って交流を深めていくことを確認し合った。その後、全員で土を混ぜ、プランターごとに学生が通所生にチューリップの球根を1つずつ丁寧に手渡ししながら協力し合って植えた。最初は、通所生の言葉が聞き取りづらいこともあったようであるが、学生たちはすぐに慣れて、いろいろな話をしながら楽しそうに球根を植えていた。作業中あちらこちらから笑いが絶えず、職員から感謝され、次の企画についての期待も寄せられた。

(2) アドバイザー制度の活用

本学ではアドバイザー制度を組織化している。教員は、1年生から3年生まで各5、6人の学生のアドバイザーになる。特に入学直後の1年生とは前期の4カ月にわたり、薬学部では課題志向的スモール・グループ・ディスカッションを、生命科学部では英文講読などをアドバイザー単位で実施し導入教育の一環としている。アドバイザーコンパなどもあり、学生にとっては学年の縦の交流の機会ともなっている。

本取組A、Dではこのシステムを有効に活用している。従来の取組で教員はどちらかというアカデミックアドバイザーとして機能しているが、学生主催のセミナー開催などで教員は、アドバイジークループの動きをスーパービジョンする機能も併せ持つことになる（図1、図2）。

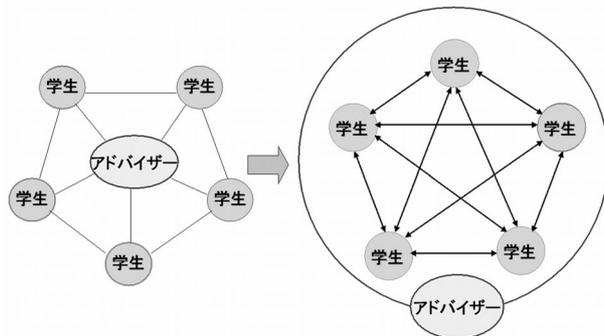


図1 アドバイザー制度

(3) 学生参加の委員会活動

5つの各プロジェクト委員会は教員・職員・学生から構成され、プログラムの立案・計画・実行・評価に3者が関わる。

(4) 取組方法の特色

既存のシステムを発展的に活用する。

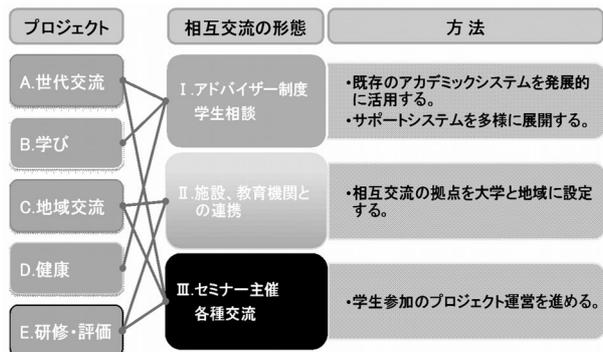


図2 取組方法の特色

(5) 5つのプロジェクトの特色

(i) 世代交流プロジェクト

学生は、子供や先輩との相互交流を進める。交流の媒体となる活動は理系大学の特色を生かす活動である。子供との理科実験で、学生は教える立場になり事故の起きないように注意し、子供に分かりやすい言葉で説明する役割を果たす。また学園祭では大人も満足するようなハッとさせる科学実験を入念な準備のうえ行う。また、学生は自らの関心に基づくセミナーを開催し、人生設計にも役立つように身近な先輩の体験談を聞き、将来展望を確かなものとする。

(ii) 学びプロジェクト

基礎学力を確かなものとし、苦手意識が不得意科目にならないように個別支援を進め、学生と教員の双方関係システムの構築を推進する。また、経済支援の一環としてPCをレンタルする。

(iii) 地域交流プロジェクト

学生は、近隣の施設と相互交流を広げ、薬学・生命科学の特徴を生かした交流プログラムを展開する。また、近隣の小中学校において教員が依頼された環境教育や薬物・禁煙教育に補助的に参加する。学生は教員の単なる補助をするということにとどまらず、対象となる子供に分かりやすい教材を準備し学生教師として現場に臨む。

(iv) 健康プロジェクト

諸検査を実施し、自己理解・他者理解に役立てる。将来、人間の健康に関わる職業に携わる学生にとって

は、自分の行動・性格特徴などについて知り、新しいあり方を見出すことは大学生活の中で自分を向上させる基礎的データにもなる。検査についてアドバイザーグループ単位でカウンセラーとグループカウンセリング形式でのフィードバックを受け、必要に応じて自己表現ワークショップなどにも参加する。また、人間存在や健康に関する講演会を企画し広義の意味での健康について学ぶ。また、食育として栄養士の指導のもと料理教室も開催している。現在までに次の講演会を開催した。

「健康的な生き方」鍼灸師・中医学の視点から、松本光保先生、「歯と口の健康」坂本春生先生、小泉綾乃先生（東海大学医学部付属八王子病院）

(v) 研修・評価プロジェクト

全学生の生活実態調査を学生と教職員が作成・実施・公表し学生のニーズを把握し、今後の学生支援の参考とする。教職員対象の学生理解の研修会を開催する。アドバイザーは現代に生きる学生の価値観・生き方などについて専門家の立場からの講義を受けて、学生との関係作りに役立てるようにする。今年度は「大学生のこころのケア」と題して福田真也先生（相州メンタルクリニック）の講演会を開催した。

各プロジェクトの予定や成果はニュースレターとして配布し、またホームページなどを通して社会に発信し、問題意識を多くの仲間と共有する。

本取組の展開に当たっては、学生運営委員を応募し教員と共に企画実践する（図4参照）。

5. 本プログラムの有効性（効果）

(1) 5つのプロジェクトに共通に期待されるのは、学生の主体的な参加とそこで体得される人間知である。子供や、先輩、障がい者など「多様な人々と出会う」ことは「人間関係力」を養う機会ともなり、仲間と共に「感じ・考え・行為する」ことのできる環境は学生をエンパワーし「将来展望をひらく」ことへとつながる。そして、大学の本務である学問への姿勢は知的好奇心をもち「問題意識を成立」させることにより培われる。これら5つの期待される効果は活動に参加することで相互に補完しながら循環的に効果を発揮し、青年の人間形成に貢献するものである。

薬学部1年生（全1年生の7割）は、大学時代に身につけたい資質として「思いやり、コミュニケーション能力、判断力、正確性」をあげている。本取組は人間に直接に関わるものであり、各活動への主体的参加

を通して幅広い人間知を獲得することが期待されるものであり、学生のニーズに合致するものである。

現代はインターネットコミュニケーションが発展し人間に接する機会、多様な人と関わる機会が喪われ、青年の孤立化を助長し、対人関係を面倒と感じる青年が増えている。このような社会生活状況において、生身の人間と交流する本取組は学生のコミュニケーション能力をエンパワーし、人間形成に寄与すると考えられる。

また、薬学部生は全員が車椅子体験、高齢者の模擬体験をしており高齢者施設への訪問は学んだ実技を生かし実態を知る貴重な機会になる。将来、人間の健康に関わる職業を選択する学生の多い本学において、本取組で多様な人々と交流することにより座学では得られない貴重な人間の実感を体得することができ、多大な教育効果が期待される。研究活動の基礎は、素朴な問題意識の創造的な展開であるとも言える。

多様な交流を通しての問題意識の確立は、対象が何であれ将来の研究へと発展していく。「子供は小さな哲学者」といわれるように、子供や障がいを持つ方からの素朴な問いかけ、発想には研究の種がたくさん詰まっていることに気付いた学生は、人間と付き合うことの好きな研究者として成長していくであろう。

またグループカウンセリングでは日常的に困っている、学生同士で共感できるような悩みが表現される。もちろん個人的に深めて考えたい学生は個別カウンセリングを希望することができ、問題が複雑になる前に相談することの大切さが体験される。

これらのことは、社会で困難な状況に出会った時に「自分に引きこもらずに」自らが対処する態度形成にもつながる。人間関係に苦手意識をもつ学生は、楽しい雰囲気の中で自己表現し、今までには経験したことのない新しい自分と出会うであろう。

(2) 大学教員は日常的には、アドバイザーとして学生と関わり、同時に教員として講義や実験・演習などで指導者として学生に関わり、いわばスーパーサイザー的に学生と向き合うことがほとんどである。しかし、本取組では、学生とともに企画・実行するといういわば同じ役割で学生とともに目的志向的活動を行うことも求められており、スーパーサイザーとしての視線だけではなく活動を作るプロセスを学生と共有する、「協働者」としての役割が求められる。次に各プロジェクトの概要と相互関係について図示する。



図3 プロジェクトの概要：相互関係と有効性

6. 本プログラムの改善・評価

本取組は、学生と教職員の共同作業の上に成り立っているものであり、学生支援の基本として普遍的にあることとその時々での学内事情や社会情勢と即応して変わる部分とがある。取組の改善については時間をかけた話し合いのもとでなされるべきものであり、学生と教職員の合同委員会の機能充実が課題となる。改善に際しては、活動は交流対象者に不利益をもたらしていないか、学生の学ぶ権利を侵していないかなどがポイントとなる。

評価は多方面から多様な視点からなされる。新たな取組実施後は各プロジェクトで交流する施設の施設長、学校長と招聘講師より外部評価を受け、さらに学生の自己評価については学外の精神科医、臨床心理士による評価を受ける。さらに、学内の自己評価委員会による自己点検・評価を受ける。

本取組は、学生の人間力を高め人間性豊かな社会人を育成することに大きな目的がある。従って、学生自身が本取組に関与しての自己評価を特に詳細に実施することが重要である。各プロジェクトの導入期、展開期、終結期の3回にわたり「関係発展評価」を行い、学生の人間の成長を明らかにする。関係発展評価とは、本取組に積極的に関わることによる成長に関する自己評価法を指す。

活動成果の学園祭でのプレゼンテーション・展示に関しては、見学者へのアンケートを実施する。

評価 評価は次の6観点から実施される。 学生が身に付けた資質・能力の状況から判断した達成状況、学習に対する支援体制の整備。学習環境の整備・活用、学習指導方法の取組状況、 学生の心身の健康の保

事例35 東京薬科大学

持・増進のための教育的配慮の状況、課外活動への組織的援助・指導、学生と意見交換を行うシステム、FD・SD活動の組織的取り込みの適切性。

学生の自己評価は、自己理解（自己との関係における成長）、他者理解（人と関わることによる成長）、社会性（集団・組織化に関与することにおける成長）の観点から評価される。

評価結果の活用 評価結果は公表し、次年度の取組を改善する資料とする。学生は自己評価を次年度の学生生活への目標設定に活用する。行動特徴についての長所や改善点についてアドバイザーと確認をし、必要に応じてカウンセラーとの面談を勧める。

7. 本プログラムの実施計画・将来性

初年度は、生活実態調査を特に詳細に行い、大学の立地条件からもたらされる制約や理系2学部からなる本学の特徴を明らかにする。調査項目は；最近の生活状況・カリキュラムについて・学習のつまずき・修学・ボランティア交流活動・健康状態・悩み・学生支援について、他、から構成される。

交流事業は、既存のネットワークを活用しながらも、同窓会や近隣施設との新しいネットワーク作りに参加することから開始される。開始2年度には、新入生は4月の入学時から本取組への参加が可能になり、導入教育の一環としても機能するようになる。

初年度に学生委員として活躍した学生が新入生に本取組を伝え新たな動きの起こることが期待される。交流の対象者が拡大し年間を通しての交流が実現する。

3年度には、新しいサポートシステムが日常的に機能し、確立する。交流対象施設や学校との学生支援に関する実績が学生・教職員で共有され、新しい大学文化が醸成される。また、大学において交流対象施設や

学校との合同活動を開催することが可能となる。

4年度は、社会のニーズ、学生のニーズに応じて相互交流の対象を広げ、よりグローバルな観点からの異文化交流も促進する。初年度の学生が卒業する年度であり、取組の総括と次の新たな展開への展望を拓く。薬学や生命科学の発展に即応した学生支援システムの構築が期待される。

補助期間終了後は、学生支援の成果に関して報告書、ホームページなどにより広く社会に周知し社会の理解を得て、継続する予定である。

評価体制は維持し、流動的な社会状況における学生のニーズを把握し適切な学生支援を行う。大学教育への学生の期待を継続してリサーチし、学生の人間形成に果たす大学人の社会的責務を受け止め、人間の生きる力や知恵が十二分に涵養される人的・物的環境を整え、学生が安心して大学生生活を過ごすことができ、社会に拓かれた知の共同体として大学が発展することを将来にわたって目指すものである。

新たな取組は、学長のリーダーシップのもと図4のように組織化する。

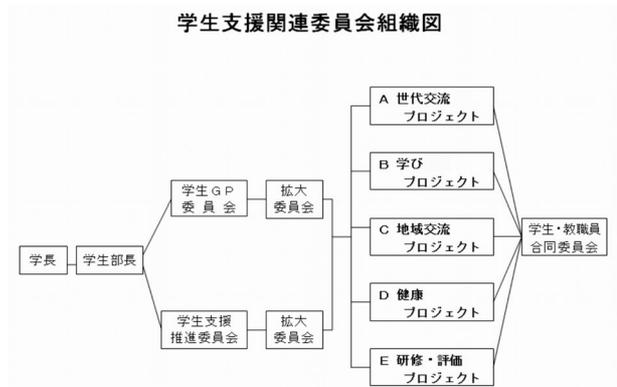


図4 新たな取組の組織図

選 定 理 由

東京薬科大学においては、学生支援に関する目標等に基づき、学生支援の取組を具体的かつ組織的に実施しており、その結果は2006（平成18）年度の大学基準協会による評価において学生生活・支援について一定の評価を得ていること、ISO取得により環境保全・改善に向けての社会的ニーズに応えていること等で実証されるように、大きな成果を上げていると言えます。

また、今回申請のあった「人間知を育む相互交流プログラムの展開」の取組は、世代交流、学び、地域交流、健康、研修・評価プロジェクトから構成され、それぞれの支援プロセスが明確で評価体制も整備されており、他に見られない工夫ある取組であると言えます。

特に、修学上や健康面で潜在的に問題を抱えている学生の早期発見・早期解決を目指していることに加えて、多様な人々との交流によって問題意識の確立、多様性、生きる力などの涵養を図る総合的な学生支援制度は、学生の主体的参加と体験を重視した全学的な取組であり、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。